

今回は、関飛行場に関する地域研究部の活動報告です。

◇ 学術発表会や全国大会で、優秀賞・最優秀賞を受賞しました！

日本考古学協会総会高校生ポスターセッション 優秀賞

- ・主催 日本考古学協会 ・日時 2022年5月29日(日)
- ・内容 「関飛行場及びその関連施設の調査 陸軍秘匿飛行場の作戦構想とその実態」
- ・形式 オンラインによる発表 (会場：早稲田大学戸山キャンパス)

◆当日にいたる経緯、当日の様子

日本考古学協会は、全国で約4千名の会員を擁する考古学界を代表する学術団体です。近年では、考古学に関心を持つ人々の裾野を広げるために、さらには後継者育成の意味も込めて、高校生を対象としたポスターセッションを総会の場で行っています。高校生が研究者を前に、自らの学びの成果を発表する場であると同時に、研究に対する助言を受けたり、同じ学問を志す高校生同士の交流の場としての役割も果たしています。



関高校も、2016年度から参加するようになり、2019年度には最優秀賞を受賞しています。ただ、2020年度はコロナ禍によって中止となり、2021年度はデータ提出とポスター審査のみとなりました(本校は優秀賞受賞)。今回は、事前に提出したポスターを紹介しながらのオンライン発表会が実施されることとなり、本校は、秘匿飛行場の研究とトチノミのアク抜き研究のふたつを発表しました(左写真)。

◆辻秀人先生(日本考古学協会会長)からのコメント

本発表は、歴史の中に埋もれようとしていた岐阜県内の秘匿飛行場の存在を明らかにし、歴史的な意味を考察し、地域に伝えようとした研究活動をまとめたものでした。秘匿飛行場が関高校の近くに存在するという情報を得て、関係自治体史を調べ、さらには現地を確認し、ドローンによる写真撮影、現地調査と測量調査を実施する行動力に脱帽しました。また、地域の方々からの聞き取りも加えて多くの新たな事実を発見し、太平洋戦争時に地域で何が行われたかを描き出したことは大きな成果だったと思います。さらに研究成果を普及するために自治体に周知と活用において働きかけることは、研究成果を地域にお伝えするために大切に望ましい活動だと思っています。

全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会 最優秀賞

- ・主催 全国高等学校文化連盟社会科学・郷土研究専門部設立準備会
- ・後援 全国高等学校文化連盟、公益社団法人横浜市ふるさと歴史財団
神奈川大学、鶴見大学、高大連携歴史教育者研究会
- ・内容 「関飛行場に関する研究報告 ～郷土に残る戦争の記録・遺構・記憶を追う～」
- ・日時 2022年8月5日(金) 11:00~16:00
- ・会場 戸塚公会堂(神奈川県横浜市)
- ・形式 全国代表校によるプレゼンテーション大会

◆当日にいたる経緯、当日の様子

岐阜県高文連地域研究部門には5校が所属しており、それぞれが特色ある活動を続けてい

ます。ただし、全国高文連所属の全国組織が存在しないため、全国総合文化祭の開催都道府県に郷土研究関係の専門部の組織があるときだけ、協賛という形で発表会を開催しています。こうした状況を打開するため、2008（平成20）年に、岐阜・静岡両県の高文連組織が合同で郷土研究発表大会を実施したところ、次第に参加校が増え、名称を前掲の通り改めて今日にいたっています。

2019年度には、全国総文祭開催地の佐賀県で発表会が行われました。2020年度の岐阜大会はあいにくのコロナ禍であったため、論文もしくはポスターのみの審査となりました。本校は公共・政策部門及びポスターセッション部門でそれぞれ最優秀賞を受賞しています。2021年度の鳥取大会もコロナ禍を考慮し、提出したプレゼンテーションデータの審査となり、本校は公共・政策部門で優秀賞を受賞しました。



今年度行われた神奈川大会は、3年ぶりの現地開催となりました。2021年2月から始まった秘匿飛行場の研究は、すでに「全国高校歴史文化フォーラム」や前掲「日本考古学協会総会高校生ポスターセッション」で上位入賞を果たしています。

同一テーマを題材とした研究を別のコンクールで発表する場合には、必ず別内容の研究結果を付するのが研究を行う上でのマナーです。本校も、新たに、理系分野からのアプローチを加えて、今回の大会に臨みました。

◆審査結果と今後の課題

多角的な研究手法、戦争遺跡の記録を残す社会的意義、地域と連携した研究のあり方などを評価していただき、今回、最優秀賞を受賞することができました。

その中でも、地域連携による研究は、本校地域研究部の活動の特色といっても過言ではありません。今回の研究を通じ、様々な事実が明らかにされましたが、当時を知る高齢者の方々の協力があって初めて成し得たことですし、ドローンによる上空や地下壕内の撮影も、高校生のみでは不可能でした。自治体からは、測量調査の指導・協力（関市）、広報やポスターでの周知（美濃加茂市）などご協力をいただきました。

高齢者の方々からは「昔のことをきちんと記録してもらえてありがたい」「若者が頑張っているのだから、自分たちができることは協力したい」と言葉をいただいています。こうした激励や期待にお応えする意味でも、今後も研究を継続し、発表会の開催やパンフレットの作成等で、学びの成果を地域に還元していく予定です。



◇ 関飛行場とは何であったか

関高校からほど近い関市大杉から美濃加茂市稲辺、坂祝町深萱の地で、陸軍飛行場の建設が開始されたのは、日本敗色が濃厚となった1944（昭和19）年12月のことです。工事は翌年2月から本格化し、4月には陸軍の単発機や双発機が滑走路から飛び立ったそうです。

飛行場建設の当初の目的は、敵襲に備えての航空兵力の分散化でしたが、1944年6月のサイパン陥落後は本土防衛のための防空拠点として、さらに1945年3月の硫黄島陥落後は、本土決戦に備えての特攻基地としての役割を与えられていたことが、今回の研究により明らかになりました。地域研究部では、旧防衛庁がまとめた戦史、防衛省データベース、関係自治体史を調べるとともに、滑走路跡や周辺に残る地下壕などの遺構の踏査・測量を行い、さらに当時を知る高齢者の方々からの聞き取り調査を行いました。

飛行場からほど近い坂祝には、川崎飛行機の分工場が設けられ、関高校の前身にあたる武



闘敢の隊身挺勞勤子女

儀高等女学校の女学生も動員されたとのこと。『関高等学校創立五十周年史』には、飛行機工場で機体の鋸どめ作業に従事する当時の女学生の写真が掲載されています(左写真)。さらに、武儀高等女学校は、米国本土を空襲するために計画された「風船爆弾」製造にも、大きく関わっています。

戦争体験が風化する中で、この地域に陸軍飛行場があったこと、女学生が飛行機や風船爆弾の製造に動員されたことは忘れ去られ、地下壕の痕跡も地上から消えようとしています。

幸いなことに、本校地域研究部の活動が新聞報道や自治体広報などで扱われるようになった結果、地域から様々な情報が寄せられるようになりました。終戦直前に起きた飛行機事故、滑走路付近の民家に宿泊していた将兵の暮らしぶり、戦時中に動員された兵士たちによって行われた古墳の盗掘事件等、今まで記録されることのなかったできごとが、次々と明るみにされつつあります。

今後は、さらに調査を進めると同時に、保全や活用に関する活動も進めていく予定です。

◇ 活動に参加した生徒の感想

◆関飛行場の研究には2年生の終わりから、先輩方の研究を引き継ぐ形で参加しました。地下壕へフィールドワークに行ったり、当時を知る人に聞き取りを行ったり、他にもたくさんのことを体験しました(右写真、新たに見つかった塹壕の調査)。

私たちはいつもたくさんの方々から協力をいただいています。先輩方の研究と、地域の方々の協力、そして顧問の先生の力がなければ、私たちは最優秀賞を受賞することはできなかったと思います。「関飛行場という歴史を風化させないで欲しい」という、この研究に協力していただいた方々の願いも果たせたと思います。

3年間、オンラインやデータ審査での発表が中心でしたが、最後に実際に発表をして、成功出来たことは本当に嬉しいし、顧問の先生を含め、尽力していただいた方々には、言葉に表せないくらい感謝しています。



◆僕は、大会直前にトラブルが重なり、3年間の最後を飾る大会へ出場することが危惧されていましたが、校長先生を含め、たくさんの人の支えのおかげで、仲間と3人揃って大会へ出ることができ、大変感謝しています。そして肝心の発表では先輩達から受け継いだ研究と、それをさらに発展させた僕達の努力があり、最優秀賞という形でたくさんの専門家の方達からも僕達の努力が認められました。仲間達、そして応援して下さったたくさんの方々には本当に感謝しています(下写真、高齢者の方々との記念撮影)。



◆全国の舞台で、いろいろとありましたが、最後に3人で発表することが出来てほんとに良かったです。関飛行場の研究は、実際に防空壕に入ってみたり、聞き取り調査を行うなど、興味深く、とても楽しかったです。地域の方々がとても協力的で、応援していただけて本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ぜひお会いして、今回の受賞の件に関し改めてお礼を述べたいと思っています。